

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：34310

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12865

研究課題名（和文）組織エスノグラフィーの実践的有用性の検討

研究課題名（英文）A Study of the Practical Relevance of Organizational Ethnography

研究代表者

福本 俊樹（Fukumoto, Toshiki）

同志社大学・商学部・助教

研究者番号：50736907

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、組織エスノグラフィーが経営実践に対して持つ有用性を検討することにあった。

本研究の成果は、第1に、組織文化・経営理念の浸透に際して管理者が用いようとする戦術(社会化戦術)を、組織エスノグラフィーをはじめとする質的調査に基づき開発する方途を示したことにある。第2に、研究者が実務家の問題解決を支援する介入的アプローチとして、組織エスノグラフィーに関わるさまざまな方法論を検討したことにある。第3に、大学発ベンチャーを企てる企業家の起業プロセスと、研究者によるその支援を、リアルタイムで捕捉したことにある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、経営組織への介入的アプローチとしての組織エスノグラフィー、および、それに関連する質的方法論が果たす実践的意義を検討し、経営組織論という学術領域の実践的有用性の向上に貢献したことにある。

同様に、本研究の社会的意義は、経営実践と研究実践との間の乖離が指摘される昨今（e.g. リガーVSレリヴァンス問題）、実践的有用性を志向する研究方法論を提唱することで、両者の間に横たわるギャップを橋渡しすることに貢献した点にある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the practical relevance of organizational ethnography for management practice.

The study, first, showed ways to develop tactics(socialization tactics) that managers can use to instill organizational culture and management philosophy based on qualitative research, including organizational ethnography. Second, it examined various methodologies related to organizational ethnography as an intervention approach for researchers to support practitioners in problem solving. Third, it captured the entrepreneurial process of university venture start-up and the support provided by the researcher in real time.

研究分野：経営組織論

キーワード：組織エスノグラフィー 実践的有用性 組織社会化 組織開発 臨床的アプローチ

1．研究開始当初の背景

近年、組織エスノグラフィー（金井・佐藤・クンダ・ヴァン・マーネン，2010）に対する関心が高まっている。組織エスノグラフィーの強みは、（定量研究では十分に明らかにできない）組織内部の人々の実践や意味世界を、詳細に理解する点にあると言える。その反面、組織エスノグラフィーが経営実践に対して持つ実践的有用性については、しばしば疑問が呈されてきた。

このことは、近年の経営学において盛んに論じられているリガー／レリバンス問題とも関わっている。「学術研究としての厳密さ（リガー）の追求は、経営実践の役に立つ実践的有用性（レリバンス）を保障するわけではない」という指摘がなされて以降、われわれはもはや、「科学的に厳密なよい研究をしていれば、きっと経営実践の役に立つはずだ」という素朴な想定を置けなくなっている。今、われわれ経営学者に求められているのは、研究者は調査研究を通して経営実践にいかに関与（介入）することが可能なのか？といった問いに正面から向き合っていくことであろう。

2．研究の目的

以上の観点に基づき、本研究では、組織エスノグラフィーが経営実践に対して持つ実践的有用性を検討していく。「組織エスノグラフィーという調査研究を通じて、研究者はいかなる形で経営実践に関与（介入）することができるのか？」これが本研究の学術的問いである。

3．研究の方法

以上の研究目的を達成するために、本研究では以下の二つの方法を採用した。第一に、経営実践への介入的アプローチをとる方法論の学説研究である。経営組織論は古くより、経営組織への学術的知見を活かした介入・支援を試みてきた領域であり、またその介入・支援のアプローチ方法も多岐にわたっている。そうした介入・支援を志向する経営組織論の系譜を辿ること、そして、様々なアプローチ間の異同を明確にすることは、組織エスノグラフィーをそれら介入的アプローチの一つとして位置付ける際にも有用であるだろう。

第二に、研究者による調査研究活動それ自体を対象とする反省的（リフレクシブ）な考察である。本研究でも、筆者自身が実施する組織エスノグラフィーを対象とした反省的考察に基づいて、組織エスノグラフィーという調査研究方法がいかに経営実践に役立ち得るかを検討していく。

4．研究成果

本研究の主な成果は、以下の通りである。

（1）組織社会化戦術の開発（福本，2019；福本，近刊）

組織への新規参入者（以下、新人）に組織の文化（理念・価値観・行動規範など）を教え、新人を組織の「一人前の成員」へと変えていくプロセスは、組織社会化と呼ばれる。本研究では、新人に対する効果的な組織社会化手法の探究を目的とした理論的・方法論的研究に取り組んだ。具体的には、組織社会化戦術（Van Maanen and Schein, 1979）の理論的・方法論的枠組みに基づき、組織が用いる種々の社会化手法（社会化戦術）に対して新人が示す多様な反応を、組織エスノグラフィーをはじめとする詳細な質的研究によって経験的に捉えていくことで、種々の社会化手法（社会化戦術）の使用に際して、管理者が実際に参照し役立てうる戦術的な知識を開発した。

上述のように、本研究では、経験的調査に際して組織エスノグラフィーを用いたが、その際、その実践的有用性をめぐって、組織エスノグラフィーのレトリックに対する反省的考察（Van Maanen, 1988）および、プラグマティズムやアクション・サイエンス（Argyris et al., 1985）などの介入にまつわる科学思想を参照することで、管理者が経営実務の中で実際に使うことのできる知識（＝処方的知識）の開発・提示を第一に目指すという研究方法論を示した。その上で、食品関連の企業 2 社（東京都、京都府）における社会化プロセスの事例分析を通じて、新人教育・管理に携わる管理者が使用可能な社会化戦術（とその効果的な使い方）の開発・提示を行なった。

（2）経営組織への介入的アプローチの学説研究（福本，2023）

経営組織論において、経営組織への介入を志すアプローチは、古くは人間関係論に始まり、行動科学に依拠した新人間関係論、シャインの組織文化論（Schein, 1985）など多岐にわたっている。本研究は、「組織開発」というラベルのもとに包含しうるこれら介入的アプローチの系譜、および、その方法論上の異同を、学説研究を通して明らかにした。こうした試みは、組織エスノグラフィーをそれら介入的アプローチの一つとして位置づける際の参照点となった。

(3) 企業家の支援を志向する調査方法論の開発 (伊藤・福本, 2021)

本論文は、「研究者が企業家の企業家活動を、調査研究を通して支援する」という関係を構築していくための研究方法論を検討・開発した。具体的には、幼児心理学において提唱された二人称的アプローチ (Reddy, 2008) を企業家研究に応用するとともに、共愉性 (Illich, 1973) 概念を再訪することで、筆者ら自身のフィールドワークにおける起業家との関係構築の事例を反省的に考察しながら、経営学の知識創造システムそれ自体を関係構築のための道具として利用する可能性を示唆した。

・引用文献

- Argyris, C., Putnam, R. and Smith, D. M. (1985). *Action Science: Concepts, Methods, and Skills for Research and Intervention*, Jossey-Bass.
- Illich, I. (1973) *Tools for conviviality*. New York: Harper & Row. (渡辺京二・渡辺梨佐訳『コンヴィヴィアリティのための道具』筑摩書房, 2015年。)
- Reddy, V. (2008) *How infants know minds*, Cambridge and London: Harvard University Press. (佐伯胖訳『驚くべき乳幼児の心の世界:「二人称的アプローチ」から見えてくること』ミネルヴァ書房, 2015年。)
- Schein, E.H. (1985), *Organizational Culture and Leadership*, Jossey Bass Publishers. (清水紀彦・浜田幸雄訳『組織文化とリーダーシップ: リーダーは文化をどう変革するか』ダイヤモンド社, 一九八九年。)
- Van Maanen, J. (1988). *Tales of The Field: On Writing Ethnography*, The University of Chicago. (森川渉訳『フィールドワークの物語 エスノグラフィーの文章作法』現代書館, 1999年。)
- Van Maanen, J. and Schein, E. H. (1979). Toward a theory of organizational socialization. In B. M. Staw (Ed.), *Research in Organizational Behavior*, Vol. 1, (pp. 209-264). JAI Press.
- 金井壽宏・佐藤郁也・ギデオン・クンダ・ジョン・ヴァン・マーネン (2010). 『組織エスノグラフィー』有斐閣.
- 福本俊樹 (2019) 「処方的知識の開発を主軸とした組織社会化研究の新展開」神戸大学大学院経営学研究科博士論文.
- 伊藤智明・福本俊樹 (2021) 「起業家と研究者の関わり合い: 起業家研究の方法としての二人称的アプローチと共愉的な道具」『企業家研究』第18号, 23-40頁.
- 福本俊樹 (2023) 「組織開発と創造性」(経営学史学会監修・桑田耕太郎編『創造する経営学 経営学史叢書 第1期 第7巻 創造性』文眞堂, 110-131頁).
- 福本俊樹 (近刊) 「「パーソン」を活用する組織社会化: 個人化された戦術の設計へ向けて」『同志社商学』第75巻, 第1号.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 福本俊樹	4. 巻 7
2. 論文標題 組織開発と創造性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 経営学史学会監修・桑田耕太郎編『創造する経営学 経営学史叢書 第 期 第7巻 創造性	6. 最初と最後の頁 110-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福本俊樹	4. 巻 75
2. 論文標題 「パーソン」を活用する組織社会化：個人化された戦術の設計へ向けて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福本俊樹	4. 巻 -
2. 論文標題 経営理念の「浸透」から「共有」へ：理念の共有を促進するマネジメント	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『研究レポート リモート時代の理念と経営（仮）』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤智明・福本俊樹	4. 巻 18
2. 論文標題 起業家と研究者の関わり合い：起業家研究の方法としての二人称的アプローチと共働的な道具	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 企業家研究	6. 最初と最後の頁 23-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 福本俊樹	4．巻 9-10月号
2．論文標題 理念は「共感」して「選び取る」時代に 薄れゆく「共同体」象徴の機能	5．発行年 2021年
3．雑誌名 衆知	6．最初と最後の頁 58-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 福本俊樹	4．巻
2．論文標題 処方的知識の開発を主軸とした組織社会化研究の新展開	5．発行年 2019年
3．雑誌名 神戸大学大学院経営学研究科博士論文	6．最初と最後の頁 1-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1．発表者名 福本俊樹
2．発表標題 「パーソン」を活用する組織社会化：個人化された戦術の設計へ向けて
3．学会等名 日本経営学会 関西部会 第674例会
4．発表年 2023年

1．発表者名 伊藤智明・福本俊樹
2．発表標題 起業家と研究者との共働的な関わり合い：起業家研究の方法としての二人称的アプローチ
3．学会等名 第9回 アントレプレナーシップ・コンファランス
4．発表年 2020年

1. 発表者名 Fukumoto, T. and Chiaki, I.
2. 発表標題 “ Mutual affection ” : Exploring tactics for initiating a recurring dialogue between practitioners and researchers
3. 学会等名 IIR Summer School 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤智明・乃村一政・柳沢究・福本俊樹
2. 発表標題 二人称的な他者との対話を語り直す起業家 建築学と経営学との協奏による時間の重ね描き
3. 学会等名 2021年度組織学会年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 福本俊樹
2. 発表標題 役に立つ研究を考える：行為する経営学の系譜
3. 学会等名 第26回 京都ものづくりバレー研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤智明・福本俊樹
2. 発表標題 創業期における企業家の省察についての二人称的アプローチ：実務家と研究者との共働的關係の生成に注目して
3. 学会等名 企業家研究フォーラム 2018年度春季研究会
4. 発表年 2018年～2019年

〔図書〕 計1件

1．著者名 上林憲雄・庭本佳子（編著）	4．発行年 2020年
2．出版社 文眞堂	5．総ページ数 260
3．書名 経営組織入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

株式会社ビジネスリサーチラボ 『人と組織のマネジメントバイアス』に寄せて（４）：福本俊樹氏 https://www.business-research-lab.com/single-post/20200817?fbclid=IwAR1P-yfMdT9g0EaHXH0FToAwoCqNrs0RGp6QNZKvsnCkaCZ1YYU4Y17DSII
--

6．研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------